

NIEニュース

エヌ・アイ・イー



Newspaper in Education

第98号
2021.7.15

●特集・地域をつなぐNIE/新聞の「今」—コロナ禍のデマから考える▶1~5 ●アドバイザー紹介/フラッシュニュース▶6~7 ●〈NIEでいきいき〉〈NIEあれこれ〉▶8

©2021年 日本新聞協会

編集・発行 一般社団法人 日本新聞協会 TEL: 03-3591-4410 (NIE担当) FAX: 03-3592-6577 e-mail: nie@pressnet.or.jp
〒100-8543 東京都千代田区内幸町 2-2-1 日本プレスセンタービル [https://nie.jp] [https://www.facebook.com/Nie47]

特集 地域をつなぐNIE

2020年から順次実施されている新しい学習指導要領は、「社会に開かれた教育課程」の実現を掲げている。子どもを取り巻く環境が激しく変化する中、教育を通じてよりよい社会をつくるという目標を学校と社会が共有し、連携していくことが求められている。今号では推進協議会と先生方から、それぞれの立場での考察とともにNIE実践報告を寄せていただいた。

第26回NIE全国大会札幌大会は、スローガン「新しい学びを創るNIE」を掲げて8月16日、札幌市からインターネットでライブ配信する。

新聞の長所を再認識

学習指導要領は、学校・家庭・地域で幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たす。今回の学習指導要領には、教材や教育環境の充実の中で「新聞」などを一層活用することが明記された。学習指導要領が重視する主体的・対話



北海道NIE推進協議会 会長
菊池 安吉

的で深い学びとNIEの親和性が高いことは、数々の実践が物語っている。

予測が困難で人工知能（AI）が飛躍的に進化する時代である。その中で、持続可能な社会の担い手として、変化に積極的に向き合い、さまざまな情報の価値を見極める力を育てることが求められている。

新型コロナウイルス感染拡大は、グローバル化した世界を如実に示した。一方で、SDGs（持続可能な開発目標）の達成に向けて地球的課題の視点を持つことの重要性にも気づかせてくれた。情報を入手する手段も多様化する中で、新聞・テレビ・雑誌・書籍・インターネット・ネットニュース・SNSな

どの長所や短所を整理することが重要である。情報源の信頼性や情報の真偽や意図を見極め、適切に選び取るメディアリテラシーを身につけることが求められている。コロナ禍で、情報の信頼性や一貫性、携帯性、保存性などの面で「新聞」というメディアが持つ優位性や良さを再認識することができた。

多彩な分科会

当日の全体会は、ノンフィクション作家の梯久美子さんが「歴史と出会う〜新聞という回路〜」と題して基調講演を行う。続くパネルディスカッションでは、元プロ野球選手の田中賢介さんを始め、道内在住のアスパラ農家、漁師、高校図書館員などさまざまな人たちが、家庭・学校・地域という立場から議論を深め大会スローガンに迫る。

全体会の終了後、オンデマンド配信する分科会では、小・中・高校や特別支援学級、高等

養護学校などの実践を発表する。北海道には15の都府県がすっぽりと収まるほど広い、という新聞広告を見たことがあるが、

広さゆえに札幌市と道南函館、道東釧路の抱える問題は当然違ってくる。アイヌの歴史や文化・人権、地域学習「〇〇学」、金融教育、北海道の食、学校図書館とNIE、探求学習の取り組み、小規模校による地域を巻き込んだ学校ぐるみの実践、GIGAスクール時代におけるNIEとICT、新聞データベアの活用、日本遺産「炭鉄港」など、分科会のテーマは多彩だ。コロナ禍で制限を受けながら、昨年の臨時休校・分散登校・オンライン授業などを経験して前進してきた授業実践の成果と課題を検証、共有したい。

新型コロナウイルス感染状況を考慮し、会場に参加者を集めずインターネット配信のみに変更して実施する。全国の実践者・新聞関係者と直接顔を合わせられない寂しさはあるが、北海道からの提言に意見を寄せていただければ幸いである。

新聞記事で県内の特色を把握



香川大学教育学部
准教授 (元広島大学
附属三原小学校教諭)
神野 幸隆

広島大学附属三原小学校での実践を紹介する。4年社会科

「わたしたちの県」では、伝統文化や地場産業、自然環境の保護などに取り組む特色ある地域を取り上げる。しかし、掲載地以外については知る機会がない。そこで、1か月間、県内記事を取り抜き、読解する活動を行えば、各地の特色やイメージの形成につながる考えた。

見出しと写真で分類

それぞれの児童が記事から得た担当地域の特色を報告するようにならせた。これにより責任感が生まれ、主体的に記事を読み込むことができた。

日頃から段落の要点を探し出すことを繰り返し学習したり、分類の理由を考えたりする学習



見出しや写真に着目し分類

を行っていた。そのため、読み取り開始と同時に見出しと写真に着目し、大まかな分類をする班が見受けられた。以下は各班のホワイトボードの記述である。
①多かった記事②イメージしたこと

【しまなみ海道・尾道市から島嶼部】①行事、サイクリング②観光客が来るように行事をたくさん開いている。自転車道路を整備して人気を集めている
【三次市・世羅町】①自主防災、特産品(食べ物)、花、子供、風景、演奏会、歌②農園が多いだろう。ワイン、博物館に

観光客を集めている

【庄原市・神石高原町】①公共機関、安全②自然が豊か。比婆牛がブランド牛。高齢者に配慮した街づくり

【安芸高田市・安芸太田町】①神楽、お祭り、マラソン大会②祭りや色々な大会で町を盛り上げていく。元気で楽しいイメージがする

新聞は地域と生徒の橋渡し



妙高市立
新井中学校 教諭
丸山 信昭

新聞から地域を学ぶ、新聞が地域と生徒を結び付ける。新聞活用は、地域学習の可能性を広げる大きな材料になる。前任校での実践を紹介する。

記事活用して深く学ぶ

社会科の実践では、公民的分野「地方自治」の単元で新聞記事を使い、生徒は次のような手

【福山市・府中市】①演奏会、祭り、美術、伝統②伝統行事が多い。高齢者や障害者でも楽しめることができる街づくり

関心喚起に効果発揮

NIE実践の時期が秋の収穫や観光シーズンと重なったことで、地域の特色を把握しやすかった点は良かった。学校に届く

順で地域について深く考えた。

- ①地元の課題(人口減少・過疎化)を考える
- ②地域活性化の事例を新聞記事から収集する(情報収集)
- ③地域活性化の複数の記事を比較し、地元にかせる取り組みを選ぶ(情報比較・情報選択)
- ④選択した地域活性化の取り組みを分析し、地元にかせるポイントを考える(情報分析・情報活用)
- ⑤分析結果をもとに地元の活性化プランを考えて提案・共有する(情報共有)

地元紙の地域面には当該地域の詳細が載るが、別地域の記事が少なかった。別エリアの版も入手し、理解できるようにしたい。また、白地図を教室に掲示し、該当する場所と記事を対応して貼れば、詳細な位置も理解できる。身近な地域への関心を高めるために、新聞記事が効果を発揮した実践となった。

本実践の生徒の振り返りでは、「妙高市だけでなく、さまざまなどころで少子高齢化や人口減少が進んでいると新聞記事を探して思った。地域によって特産品やアピールポイントは違うけれど、妙高市にかせるやり方がたくさんあった」という記述が見られた。生徒は、記事



地域活性化プランを提案

から地域の課題を深く学ぶだけでなく、それが日本全体の課題であることにも気付くことができた。

な学習の時間での「妙高の将来を語る会」に結び付いた。総合では、地域に関わる過去の新聞記事を収集し、魅力や課題を再発見した。それらをもとに、生徒は「観光」や「土地活用」などテーマごとに、地域の「未来

この社会科学の実践が、総合的

の模造紙に、全校生徒約420人のメッセージを分けて貼り付けた。

のカタチ」を提言。各テーマに造詣の深い地域の方々を招き、生徒の提言に対して率直な指摘・助言をいただいた。生徒は意見交流を通じ自分たちの考える「未来のカタチ」を深めていった。

いずれの実践においても、生徒の授業前後のアンケート結果を見ると、「地域貢献への意識」についてプラスの変容が見られた。

なげる橋渡しとして効果的であることが明らかになった。今後は、記事から「地域を深く学ぶ」「地域人材との対話」をさらに進め、新聞活用を通して生徒の「地域参画」まで踏み込める実践を目指したい。

働く人に感謝プロジェクト



第二小中学校長 濱 秀樹
小浜市立小中学校 加福

新型コロナウイルス感染拡大という未曾有の危機に、最前線で働くエッセンシャルワーカーが大変苦労していることを新聞で知った。全国一斉の臨時休業中に、本校では職場体験等でお世話になっている地域のエッセンシャルワーカーの方々に、応援と感謝のためのプロジェクトを立ち上げた。

記事でコロナの現場知る

分散登校時に、今の日本の状

況を確認した上で、四つの新聞記事を紹介した。命がけで働く医療従事者、差別・偏見を受けながらも働く配送業者、感染拡大を防ぐためにテイクアウト等で工夫を行う小売業者と飲食業者に関する記事を全校生徒に読ませた。生徒たちは四つの業種の苦悩や状況などを真剣な表情で読み取っていた。

翌週、生徒たちは各々1業種を選択し付箋にメッセージを書いた。一気に書き上げたり、じっくり考えて言葉を絞り出したり、どの生徒も表情は真剣で「今、自分にできること」を果たそうと使命感に満ちていた。芸術部がイラストを描いた4枚

市内4業種の方々にメッセージを届けたところ、いずれも大変喜んでもらった。特に配送業者さんに電話をすると「涙が出そうだ」と喜ばれた。現場では相当ひどい扱いを受け、辛い思いをしている配送員が多いとのことだった。

後日、各業種の方々から御礼の手紙や品をいただき恐縮した。配送業者の方々の御礼には目頭が熱くなった。「配送員の励みになり、勇気をもらった」と知らされ全校で喜んだ。本プロジェクトは、生徒たちが心の学びを深めることにつながった。

その後、夏季休業短縮で給食配給が滞った時に、真っ先に助

けてくれたのが応援メッセージを送った先の飲食業の方だった。学校のために何かお返しできないかと考えてくれた。

また秋には、メッセージを送った公立病院の院長は生徒たちの職場体験ができないことを知り、「医療従事者の仕事を知ってほしい」と話を持ちかけてくれた。院長自らが調整をつけ、院内で働くさまざまな職種別の



配送業者の方々からの御礼の写真

ブースを本校に設け、仕事の紹介をしてくれた。

学校と地域が心でつながる

生徒たちは「仕事に誇りを持っているように感じた」「チーム医療で団結していることを知った」「私も医療従事者になるのが夢だ」「感謝して病院を利用したい」など、仕事の魅力を感じた。そしてこの企画が評判を呼び、地域内外の中学校にも広がりを見せた。

地域とのつながりが、年度をまたいで今年の委員会でも受け継がれた。生徒が地域貢献活動を企画して、先日、病院の周辺の清掃活動を行ったばかりだ。1年前に新聞記事から学んだことをきっかけに、今も生徒(学校)と地域が心でつながっている。

ESD教育に新聞を活用



勝山市立勝山中部
中学校 校長
道関 直哉

NIEならではの教育効果は、新聞の持つ発信力を借りて子ども達の活動を広く周知できることである。記事として新聞に掲載されることは活動の理解者を増やすだけでなく、児童・生徒の自尊感情や、教職員の意欲、保護者や地域の学校への信頼感を高める。

この考えから2012年のNIE全国大会（福井大会）では、地域を良くする中学生の活動を、積極的に新聞社に情報提供する実践を「発信するNIE」と題して紹介した。

地元の魅力や改善策発信

校長となった現在も、この考えに変わりはなく、新学習指導要領の「社会に開かれた教育課程」の先取りだと自負している。

現在は「新聞を活用した持続発展教育（NIEESD）」と銘打って校長会等で効用を紹介している。持続発展教育（ESD）に新聞を使ったり、記事から学んだ地域の魅力や改善策を発信したりするNIE実践として、

昨年度からは市内全小中学校が進めている。一端を紹介する。

中学生による河川清掃は伝統的な活動として継続してきた。

しかし、この伝統は「ごみがなくならなかった伝統」でもあると考え、生徒たちは拾うだけでなく、捨てさせない方法を考えて、ごみを分析し、捨てる人

呼びかける活動を計画。分析の結果、缶類はビール缶が多く、ビン類は農業系のごみが多いことを見つけ「犯人は大人である」と結論付けて、農協や市役所など関係機関に自分たちの解決策を提案した。この様子は「子どもから大人への発信」として新聞に大きく取り上げられ、中学生の声が社会に届く喜びを

実感した。

福井県立恐竜博物館を生かした地域の活性化案を提案する活動では、記事から先行事例を見つけ具体的なプランを市に提案した。市長からは中学生なりの活動を進めるようにと予算がつき、恐竜イラストと町名を入れたステッカーを作り販売した。

郷土を知り表現力を高める



長崎県立対馬
高等学校 教諭
横田 由美子

のほか、各教科や生徒指導部との連携など、横断的に取り組んでいる。

意見文への抵抗感が減る

なかでも定着した活動となっているのは、週1回のTNT（対高NIEタイム）で、朝読書の時間に新聞記事プリントを配布している。より効果的なものとなるよう、「視写」↓「ポイントの線引きとタイトル付け」↓「根拠を明らかにして賛否どちらかの立場から意見文を書く」と、時期に応じてステップアップさせている。

地域との連携から協働へ

校長として勤務した小学校では、地域が進める炭焼きや伝統

生き生きと活動する生徒の姿も新聞に取り上げられ、地元をPRする活動はクリアファイルやエコバッグへと形を変えて継承された。

また、数回に一度生徒の実践例を紹介し、他者の視点を共有している。教員がローテーションで記事を選定するので、対馬のニホンミツバチや渡来仏の郷土に関する記事など、バラエティーに富む。

前述のアンケートでは、意見文を書く活動を79・8%が「ためになった」と答え、自由記述では「新聞を読むことで知識が深まった」と書く生徒も見受けられた。活動への意識が高まり、意見を一定量書くことへの抵抗感も減っているようだ。

島の課題を学級新聞に

本校は県内初のユネスコスクール認定校で、その一環として

総合的な探究の時間に「ESD 対馬学」を実施し、1年生の2学期に郷土の課題についてまとめる新聞制作に取り組んでいる。全体ガイダンスの後、次の活

動を実施した。①4〜6人の班で地域が抱える課題についての記事を探して読む。②記事をもとに班で環境・観光などテーマを設定し、分野ごとに記事を分

類する。③記事を選別し、その分野における特徴や問題点を絞り込み、「対馬の抱える問題点」を考察する。④記事の配置や見出しを考え、下書き↓記事の貼

り付け↓問題点の指摘・考察を書き、新聞を完成させる。活動を通して「じっくり新聞を読む機会を持ち、協働しながら活動できた」と述べる生徒も

いた。NIEは郷土や世の中の課題を知り探究する姿勢を養うために有効だ。生徒が主体的に活動できるよう、工夫しながら指導していきたい。

新聞の「今」

新聞各社は、新型コロナウイルスを巡るニュースを日々報じている。感染者の特定につながる報道を控え、真偽不明な情報の事実確認に努めるなど、差別や偏見を生まないよう注意を払っている。コロナ報道の現場にいる記者の思いを寄稿いただいた。

コロナ禍のデマから考える



毎日新聞東京本社 社会部 川崎 桂吾

「感染者の家に石が投げ込まれた」。新型コロナの第1波が襲来していたころ、感染が確認されるケースがまだまれだった地方では、こんなうわさを耳にしたことがある人も多いのではないだろうか。

私はこのうわさの真偽を追いかけて、2020年12月31日付の毎日新聞社会面に「恐れが生ん

だ幻の投石」という記事を書いた。取材の経験から「コロナ禍における偏見」について考えたい。

結論から言えば、投石の事実

記事では新型コロナの集団感染が発生した島根県の高校も取り上げた。発生当初は誹謗中傷の電話がかかってきたが、そのことが報じられると、全国から

現実はずっと多様だ。投石のうわさを立てられた人が近所の人の優しさに触れたり、誹謗中傷のあった高校に激励の手紙が届いたように、こんな時代にも誰かをかばう誰かがいる。

最初に投石のうわさを耳にした時は「あり得る」と感じた。感染症に伴う差別は過去にも繰り返されてきたし、医療従事者への嫌がらせも問題になっていた。被害者に聞ければ、大きなニュースになると思った。

この1例を持って、全国で広まったうわさが全て「デマ」だったとは断言できない。しかし、その後、当事者の証言が出てこないところを見ると、ほとんどは人々の恐れが生み出した

とかくメディアは「負の側面」で時代を切り取りがちだ。より刺激的で、「分かりやすいニュース」が求められるSNS時代になって、その傾向は強まっている。しかし、こうした傾向は、実態以上に悲観的な社会観を人々に植え付けてはいないだろうか。言い換えれば、「世の中とはひどいものだ」という

自由になることは難しい。ただ、自由になろうとする努力はできる。新聞の役割もそこにある。記事ではコロナ禍の別の側面を伝えたかった。どれだけ刺激的で分かりやすいニュースがもてはやされる時代になろうとも、あらゆる偏見に「ひび」を入れ続けるメディアでありたいと思う。

調べ始めると、各地で似たような話があった。ただ、伝聞ばかりで取材の取っかかりがつか

「幻」だったのだろう。

コロナ禍において医療従事者



●群馬県

森下 千秋

(もりした・ちあき)

- ①大泉町立東小学校
- ②全科 ③1年

④はがき新聞を作っている。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●埼玉県

黒澤 孝祥

(くろさわ・こうしょう)

- ①埼玉県立久喜工業高等学校
- ②工業 ③10年

④「ものづくり技術者を育むNIE」が実践の基軸。現場で活用できる語彙力や読解力、望ましい職業観・倫理観などを育てている。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●静岡県

小川 訓靖

(おがわ・のりやす)

- ①静岡市立清水三保第二小学校
- ②全科 ③3年

④子どもの知的好奇心を揺さぶったり、既習事項や生活経験とつなげたりするツールとしての新聞の有効性を探っている。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●長野県

西沢 博美

(にしざわ・ひろみ)

- ①松本市立波田小学校
- ②全科 (主に社会)
- ③15年

④身近な地域の話題に興味や関心を持ってもらうために新聞を活用。記事を通して、さまざまな考え方をもち、広げることが大切である。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●長野県

宮坂 正議

(みやさか・まさのり)

- ①長野県松本県ヶ丘高等学校
- ②地歴公民 ③11年

④新聞づくりや取材活動を通して生徒が実社会と関わり、学習内容が生き生きとしたものとして感じられるよう取り組んできた。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●新潟県

泉 実

(いずみ・みのる)

- ①上越市立保倉小学校
- ②社会 ③10年

④コロナ禍でさまざまな憶測やデマが飛び交う中、新聞やICT機器を活用し、多角的な視点から真実を見極める児童の育成を目指している。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●新潟県

猪股 快門

(いのまた・よしと)

- ①佐渡市立小木小学校
- ②総合的な学習の時間、社会等 ③17年

④子どもたちの身の回りにある事象と新聞記事を結び付け、身近なことが世の中と直結していることを実感させる。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●新潟県

小池 修

(こいけ・おさむ)

- ①上越市立和田小学校
- ②社会 ③1年

④時事問題について複数の記事を比較することで、与えられた情報を妄信せず、社会的な事象を多角的に捉える力を身に付けること。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●新潟県

高澤 元

(たかさわ・はじめ)

- ①新発田市立御免町小学校
- ②全科 ③6年

④児童が人の思いや生き方を学ぶことができるような記事をストックし、一つもしくは複数の記事を組み合わせさせて教材化している。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●新潟県

井上 北斗

(いのうえ・ほくと)

- ①小千谷市立小千谷中学校
- ②社会 ③11年

④子どもの生活経験に関わりの深い記事を活用し、「新聞記事から自らの課題を探る」ことができるように工夫している。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●新潟県

海老名 崇

(えびな・たかし)

- ①新発田市立第一中学校
- ②社会 ③3年

④職場体験で学んだことと職業観や勤労観に関する新聞記事を比較することで、キャリアプランニング能力を高めることができる。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●新潟県

岡村 範雄

(おかむら・のりお)

- ①上越市立三和中学校
- ②国語 ③1年

④情報とはゆで卵のようなものであり、切り口や時間によって大きく姿を変える。複数の記事に触れることでその真の姿に迫らせたい。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●富山県

島瀬 武夫

(しませ・たけお)

- ①富山県東部教育事務所
- ②社会 ③10年

④政治・経済、人権問題等を中心に、新聞を毎朝確認して記事を収集し、深い学びに生かす手立てを検討することである。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●富山県

吉川 真理

(よしかわ・まり)

- ①富山県東部教育事務所
- ②国語 ③2年

④記事をきっかけにさまざまな事象に関心を持つことができるよう、新聞トークや新聞日記等、関わり方を工夫して継続することである。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●兵庫県

井上 幸史

(いのうえ・こうじ)

- ①姫路市立豊富小中学校
- ②全科 ③17年

④情報を活用するとは、例えるなら食材の調理。「つくとつかう」をイメージし、さまざまな新聞レシピを試していくことが大切である。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●兵庫県

渋谷 仁崇

(しぶたに・よしたか)

- ①西宮市立浜脇中学校
- ②社会 ③16年

④生徒一人一人が週に一つ以上気になった記事をまとめるとともに授業で発表している。各新聞社と交流し、学校行事の記事に取りあげてもらおう。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●和歌山県

宮脇 隼

(みやわき・じゅん)

- ①和歌山大学教育学部附属小学校
- ②国語 ③3年

④子どもが興味関心を持つような記事を選び、子どもと新聞の距離を縮めるための工夫をする。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。



●長崎県

清家 知子

(せいけ・ともこ)

- ①長崎県立長崎西高等学校
- ②国語 ③3年

④生徒や学校、地域の課題・ニーズを踏まえて目標を立て、生徒自身が紙面を読んで記事を選び、活用する取り組みを意識している。

新聞記者になりきることで、相手意識を持った読みやすい文章作りにつながるような活動を目指している。

NIEアドバイザー紹介

- ①学校名 ②担当教科 ③NIE実践歴
④新聞を活用するうえでの工夫を一言

(敬称略)



●宮城県
佐藤 慶一
(さとう・けいいち)
①仙台市立泉松陵小学校
②全科 ③2年
④児童が進んで新聞を活用する特別活動を考える。社会科の授業で、既習事項と時事的な事象の関連を教材とする。



●宮城県
鈴木 理恵
(すずき・りえ)
①仙台城南高等学校
②英語 ③5年
④校内でNIE委員が新聞記事をスクラップする。気になった記事はデータベース等で調べ、プレゼンテーションの形で発表している。



●宮城県
三嶋 廣人
(みしま・ひろと)
①宮城県宮城第一高等学校
②理科(化学) ③6年
④実社会や実生活の複雑な文脈の中で知識を活用し、自己の在り方、生き方と関連付けて思考・判断できるような記事を選ぶこと。



●栃木県
阿部 浩明
(あべ・ひろあき)
①茂木町立逆川小学校
②社会 ③4年
④主権者教育との関連から、新聞記事を通して社会的事象に関心を持ち、意見交換しながら、自分の考えを持つよう促している。



●栃木県
山田 暁文
(やまだ・あきふみ)
①栃木市立大平中央小学校
②全科 ③10年
④教室で新聞を読むようにしている。すると子どもと一緒に新聞を読むようになる。私の朝のルーティンである。



●栃木県
川村 滋
(かわむら・しげる)
①元宇都宮市立宮原小学校
②全科 ③9年
④一つの新聞記事から子どもは変わり、学び始める。そんな新聞との出会いを生む授業を創りたい。新聞は、学びをひらく生きた教材。



●栃木県
山口 哲男
(やまぐち・てつお)
①栃木県立宇都宮白楊高等学校
②国語 ③22年
④自己の特質と社会的課題を関連付け、経験や知識の意味の自覚化により、社会的事象を価値付けし直す機会となるよう図っている。

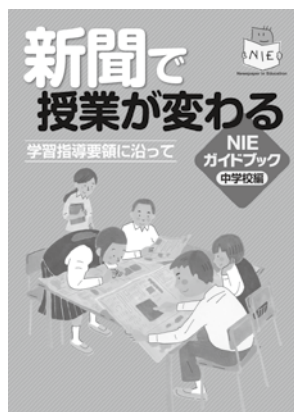


●群馬県
小須田美枝子
(こすだ・みえこ)
①太田市立北の杜学園
②国語 ③2年
④新聞に「親しむ、触れる、活用する」を合言葉としている。俳句、短歌、随筆などの投稿を通して、思考力、表現力の向上と自信につなげる。

NIEフラッシュニュース

◇第26回NIE全国大会札幌大会はオンライン開催に、第28回は松山市で開催
札幌市で開催する第26回NIE全国大会は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、現地に参集する形ではなく、インターネット配信のみの開催方法に変更となりました。8月16日に全体会をライブ配信し、終了後に分科会の動画とともに11月30日までオンデマンド配信します。詳細はNIEウェブサイト(<https://nie.jp/conference/>)参照。
第27回は2022年8月4、5の両日、宮崎市で開催します。また、第28回NIE全国大会を23年8月3、4の両日に松山市で開催することが決まりました。
◇21年度実践指定校に541校
新聞協会は、全国のNIE推進協議会から推薦された541校を2021年度NIE実践指定校に認定しました。実践期間は原則2年間。指定校ごとに配達可能な一般日刊紙を一定期間購読でき、購読料は新聞協会と各新聞社が負担します。また、14道県のNIE推進協議会では独自認定校として計57校を認定しました。
◇第12回「いっしょに読もう!新聞コンクール」作品募集中!
新聞協会は、気になった記事について家族や友達と話し合った上で、感想や意見を

を書いて応募するコンクールの作品を募集しています。小中高生が対象で、締め切りは9月8日(水)必着。詳細はNIEウェブサイト(<https://nie.jp/monthlycontest/>)参照。
◇NIEガイドブック中学校編を刊行
新聞協会は、新学習指導要領の中学校での全面实施に合わせ「新聞で授業が変わる NIEガイドブック中学校編」(写真)を刊行しました。全国の実践経験豊富な教師が執筆した授業計画をぜひ、ご活用ください。
A4判76ページ、定価495円(税込み・送料別)。購入をご希望の場合は新聞協会経理担当(03・3591・3469)までお問い合わせください。
◇「NIEはじめの一步」動画を公開中
新聞協会は、これから新聞活用を始める先生に向けた動画を公開しています(<https://nie.jp/teacher/>)。NIEへの理解が深まるよう理論編と実践編の2本立てで関口修司NIEコーディネーターが解説しています。ぜひご覧ください。





本校では「新聞を活用するこ

とで、学校図書館の校内情報ハブとしての機能を向上させ、総合的な探究の時間と各教科の連携を深める」をテーマとして、2年間のNIE実践に取り組んだ。例えば国語では、同日の異なる新聞の一面や、同一のできごとについての異なる記事の読み比べを通して、情報の伝え方・伝わり方の違いを思考ツールによって分析するメディアリテラシーの授業。英語では、フエアトレードに関する記事をクリティカルに読み、KJ法で疑問点をまとめる授業など多彩な

事務局長から一言

青翔開智中学校・高等学校は、鳥取市唯一の私立中高一貫校だ。美術館のような外観の校舎、中央の吹き抜けから教室が見渡せ

実践が生まれた。

こうした授業の中では教科を問わず汎用的に使うことができ「探究スキル」の向上を目指す

青翔開智中学校・高等学校

教諭 横井 麻衣子

◎鳥取県鳥取市／校長・織田澤博樹／生徒数・265人
◎特色・人口最少県である鳥取県に2014年に開校した併設型中高一貫校。開校時より1人1台のタブレット端末と校内全域にWiFiを完備。「学校全体が図書館」というコンセプトのもと、ICTと図書館資料を活用する「探究」を中心に据えたカリキュラムに取り組む。18年度より文部科学省スーパーサイエンスハイスクール指定。



思考ツールを使って記事を分析する生徒



記事データベースで検索して読み解く生徒

した。開校時より生徒全員がiPadを持ち学習に活用しており、校内全域でWiFiを利用できる環境がある。前述の授

業の事例においても、NIE実践指定校へ提供される新聞紙のみならず、「朝日けんさくくん」等の教育用新聞記事検索データベースを併用した。データベースを使う中で、検索キーワードの選定や記事の絞り込みを行ったり、グーグル・ワークスペース・フォォー・エデュケーションのオンラインツールを活用して、授業内で使用するワークシートの配信や回収をしたりと、情報活用能力の育成にもつなげることができた。

世の中の動きを俯瞰し短時間で一覽できる紙の新聞と、膨大な過去の新聞から特定のテーマの記事を簡単に検索し取捨選択できるオンラインデータベース、双方の利点を併用することで生徒が効率的に調べるスキルを高めたように思う。

公立校では始まったばかりのGIGAスクール構想だが、未だの学校教育のありかたを、すでに同校では垣間見ることができ。 (鳥取県NIE推進協議

会事務局長・和田進)



「新聞は窓とドア」——新聞は世界や社会を見られる「窓」、記事は情報を得られる「ドア」。パラパラめくって、いろいろな窓から眺め、「ドア」を見つけながら中に入って読もう。中学校の出前授業で話す◆「新聞について詳しく知ろう」——記事を書いて見出しを付けよう、投書欄を読んで自分の意見をまとめよう、写真を見てカメラマンの気持ちを読み取ろう。小学校では教科書ではなく、新聞をめくって学びが進む◆「新聞は面白くて、役に立つよ」——高校では新聞から多様な情報を読み取り、自分の意見をまとめたり討論したりしながら情報への接し方や扱い方を学ぶ。新聞は教材として作られていないので、授業では興味を引きそうなタイトルをつけ、「問い」を設け、楽しめる活動を取り入れながら進めていく。やはり新聞はめくらなければ始まらない。

(佐賀新聞社・多久島文樹)